

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：13201

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K14232

研究課題名（和文）パフォーマンス評価を取り入れた学習プロセスと作品を統合する音楽創作授業の開発

研究課題名（英文）Development of Music Composition Courses Integrating Learning Processes and Creative Outputs with Performance Assessment

研究代表者

多賀 秀紀 (Taga, Hidenori)

富山大学・学術研究部教育学系・講師

研究者番号：10824831

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、創作学習の評価が作品からプロセスに移行してきた背景を踏まえ、プロセスと作品を統合する評価方法を開発することを目的とした。具体的な成果として、作曲家へのインタビューによって作品を評価するプロセスや思考を明らかにしたこと、授業のパイロットケースとしてパフォーマンス課題の実践とルーブリックを作成したこと、音楽創作学習における評価の変遷を明らかにしたことなどを挙げることができる。今後は、ルーブリックの妥当性の検証や、授業モデルの中学校および高等学校への展開が課題である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、音楽創作学習における評価方法の変遷とその現代的意義を明らかにし、評価手法を再構築する知見を提供した。特に、パフォーマンス課題および評価の実践を通じたルーブリックの作成により、学習過程と成果の具体的な評価が可能となり、学習者の音楽的思考の深化が期待できる。また、作曲家へのインタビューを通じた評価プロセスの解明は、教育現場で評価基準を創出するための基盤となり、音楽創作学習の質的向上に寄与する。さらに、授業実践を通じて、教育現場での適用可能性も確認された。本研究は、音楽創作学習の評価における新たなスキームを提案し、学校音楽教育における学習者の創造性、表現力、学力の向上を目指すものである。

研究成果の概要（英文）：This study aims to develop an evaluation method that integrates the process and the final work, considering the shift in assessment focus from the final product to the creative process in music education. Through interviews with composers, the study elucidated the processes and thought patterns involved in evaluating musical works. Additionally, as a pilot case, performance tasks were implemented and rubrics were created. The study also clarified the historical changes in the evaluation of music creation learning. Future challenges include verifying the validity of the rubrics and expanding the teaching model to junior and senior high schools.

研究分野：音楽教育学

キーワード：音楽科教育 音楽創作学習 パフォーマンス課題 パフォーマンス評価 ルーブリック 質的研究 評価 インタビュー

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

音楽をつくって表現する創作学習に対して授業実践の立場がもつ苦手意識は強く(国研 2005)、現在も状況の大幅な改善は見られていない(森本・河添 2014)。また、音楽科の内容を構成する歌唱、器楽、鑑賞の各分野・領域と比べて創作学習(分野)が授業で扱われにくいことも明らかにされており(多賀・河添 2012)、継続的な授業実践の開発が必要とされている。

創作学習への取り組みが改善しない理由の一つに評価の問題がある。しかし、創作学習にかかわる先行研究や実践は、創作意図を表現する手段の開発と評価に焦点を当てたものがほとんどであり、学習成果としての作品を評価する試みはほとんど行われていない。作品は児童生徒による創作意図の反映であり評価は不可欠である。

申請者はこれまで、学校教育現場で授業実践に取り組む立場から授業モデルの開発および実践に取り組み、学習者がもつ能力の活用状況を評価する「パフォーマンス評価」が創作学習の充実に有効であることを実践的に示した。しかし、これらは創作意図を音響化する学習プロセスを重視しており、作品の評価は検討の対象としていない。パフォーマンス評価は、中教審の論点整理(平成 26 年)において、汎用的スキルや教科等の本質に関わる内容を評価する方策の一つとして重視される方向が示されている。

以上の背景から、プロセス(学習過程)と成果(作品)をバランスよく統合した創作学習プログラムと評価方法の開発が必要である。

### 2. 研究の目的

本研究は、創作学習のプロセス(学習過程)と成果(作品)を一体的に評価できるパフォーマンス課題とルーブリックを授業モデルとあわせて開発し、学校教育現場に提供することを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究は、以下の 2 つの内容からなる。

#### 【研究 1】創作意図を読み取る視点の設定とパフォーマンス課題およびルーブリックの作成

学習者が授業で創作した作品の評価を職業作曲家に依頼し、その営みについて、申請者がその手順や留意点を半構造化面接の手法を用いてインタビューする。そして、基礎資料とした職業作曲家の思考や発想をもとに、音楽創作学習におけるパフォーマンス課題と、その実践に基づいたルーブリックを作成する。

#### 【研究 2】パフォーマンス課題およびルーブリックを取り入れた授業モデルの開発と実践

申請者の先行研究で試作されたものに、【研究 1】の成果を反映して改訂・ブラッシュアップしたパフォーマンス課題およびルーブリックを取り入れた授業モデルを開発する。

### 4. 研究成果

本研究で得られた成果を以下の(1)～(3)として説明し、(4)で総括と展望を述べる。

#### (1) 音楽創作学習における評価の変遷【研究 1】

これまでの音楽創作学習において、何が評価の対象とされてきたのか。こうした問いを支えとして、音楽創作学習における評価の変遷について明らかにした。

戦後の「学習指導要領(試案)」においては、西洋音楽文化を基盤とし、学習者の作品に着目した評価が重視されていた。この時期の評価は、作品の出来栄や技能的な側面に重点を置いていたといえる。

1977(昭和 52)年の学習指導要領改訂以降、評価の対象は児童生徒の学習過程や創作過程へとシフトしていった。特に、1989(平成元)年の第 6 次学習指導要領における「音楽をつくって表現する」学習の導入は、学習活動の多様化と音楽概念の拡大をもたらした。創作過程や学習者の音楽的思考といったプロセスに着目する評価が行われるようになった。

さらに、1998(平成 10)年の第 7 次学習指導要領改訂および 2001(平成 13)年の指導要録における「学習目標に準拠した評価」の導入、その後の「生きる力」や「思考力・判断力・表現力等」の育成を掲げた教育政策の影響を受け、音楽創作学習における評価は学習過程をより重視する方向へと進んだ。

こうした変遷は、音楽をつくることの意味や授業者の音楽観を問い直すものであるといえる。さらにいえば、西洋音楽文化に基づいた創作学習が覆い隠していた授業者の音楽観が、創造的音楽学習の導入によって顕在化したとよい。評価における作品の位置づけの低下は、学力観の変遷に加え、授業者の音楽観が音楽概念の拡大に対応しきれていないことの証左でもある。授業を創造する側には、学習者の作品を広く受容できるしなやかで幅広い音楽観の獲得が求められる。

以上の内容は、2019 年 8 月 25 日に埼玉大学で行われた「音楽学習学会 第 15 回研究発表大会」において口頭発表し、『音楽学習研究』第 15 巻に査読付き研究論文として掲載された。

## (2) 作曲家による音楽作品の評価プロセスの解明【研究1】【研究2】

学習指導要領における表現領域に位置づけられた歌唱および器楽の両分野は、既存の作品を分析(analysis)して表現する学習活動が主となる。その一方で、音楽づくり・創作分野は「知識やスキルを使いこなす」という意味において統合(synthesis)の側面が強い。つまり、これらは同じ表現領域に位置づけられながらも、パフォーマンスに対して逆のベクトルが働いていることになる。そのため、作曲家による音楽作品の評価プロセスとその思考を解明することを目的として、2名を対象とした半構造化インタビューを実施した。

インタビューによって得られた質的データは、SCAT(Step for Coding and Theorization)によって分析した。具体的には、セグメント化したデータの記述と4段階のコーディング、それによって生成されたテーマ・構成概念を紡いでストーリーラインを記述し、そこから理論を記述する手続きである(大谷 2019)。これにより、作曲家が評価を行うプロセスや思考の一端を、以下の5つの主要なカテゴリーに分類することができた。

第一に「音楽を創作するという営み」として、創作が意味を共有する対話であり、そのための合理的記譜法の習得が重要であることが示された。第二に「創作(作品)を評価する視点」として、作曲家は「書かれたもの」に注目し、要求に対する達成度や技能の保持を重視することが明らかになった。第三の「評価の前提となる課題」では、教育内容から逸脱した場合の修正指示が、作曲経験に基づく判断として与えられることがわかった。第四の「評価の実際」では、描写音楽としての受容や非展開性に対する評価が行われ、創作意図の解釈が重要視される。第五の「創作(作品)を評価する営みの根底」では、時代の転換点をもたらす価値観の再創造や、多様な視角の重要性が強調された。これらのカテゴライズを通じて、作曲家が作品を評価する際の複雑なプロセスとその背景が見えてきた。

研究成果として注目すべきは、作曲家が作品を評価する際の視点やプロセスを明らかにした点である。作曲家は、作品の「書かれたもの」に注目し、それを基に評価を行うことが重要であると認識していることが示された。また、即興演奏のような記録に残らない創作行為については、他者からの評価の必要性が低いと考える傾向にあることも明らかになった。

今後、これらの知見を基にした評価モデルの構築や、実践への応用が期待できる。合わせて、評価プロセスのさらなる一般化と精緻化が必要である。

研究成果の詳細は、2022年11月6日に行われた「日本音楽教育学会第53回全国大会」、および2024年3月9日に行われた「2023年度日本音楽教育学会北陸地区例会」において報告している。また、2023年10月26日から27日かけて富山市で開催された「令和5年度全日本音楽教育研究大会高等学校部会」とそれに関わる一連の研究において、得られた知見の一部を指導助言の一環として提供した。

## (3) 創作学習の授業実践とルーブリックの開発【研究1】【研究2】

本研究における中心的課題である、学習プロセスと作品を統合する音楽創作授業の開発に向け、パイロットケースとなる授業実践、およびルーブリックの開発を試行した。授業は、申請者自身が授業者となり、富山大学人間発達科学部附属小学校の5年生を対象に、2020(令和2)年1月から2月にかけて3時間展開として立案し実践している。ルーブリックの作成にあたっては、パフォーマンス課題を実施し、複数の評価者によるモデレーションを行うことが推奨される。そこで、学習を通して児童がつくった作品を収集し、それらをもとにしたモデレーションを実施し、ルーブリックを開発することとした。

授業実践とモデレーションを通じて、以下のことが明らかになった。まず、パイロットケースとなる授業実践やルーブリックの開発を目的として研究を進める中で、実際にはパフォーマンス課題や授業設計を再考することが求められた。具体的には、「逆向き設計」論を採用し、授業の節目における児童の学習レベルや必要な学習経験の詳細な検討を行ったことにより、学習者のみならず、授業者自身も音楽そのものや音楽をつくることの意義や価値について、思考する機会を得た。また、モデレーションにおける評価者間での議論を通じて、「全体的ルーブリック」の作成に至ったものの「評価の実用性を考慮した「観点別ルーブリック」の必要性も示唆された。今後の課題としては、ルーブリックの汎用性を高めることや、新たなプランとルーブリックの開発・普及を通じて精度向上を図ることが挙げられる。

本研究の成果は、2020年10月4日から11日にかけて開催された「音楽学習学会第16回研究発表大会」、および『音楽学習研究』第16巻に査読付き研究報告として報告・掲載された。また、2023年10月26日から27日かけて富山市で開催された「令和5年度全日本音楽教育研究大会高等学校部会」とそれに関わる一連の研究において、得られた知見の一部を指導助言の一環として提供した。なお、授業実践を通して得られた児童の作品は、上記(2)における作曲家へのインタビューにおける基礎資料となっている。

## (4) 研究全体の総括と課題を含めた今後への展望

はじめに、上記(1)～(3)に基づき、研究全体を総括する。

(1)で述べたように、音楽創作学習における評価の対象は、学習者の作品から学習過程の重視へと移行してきた。この変化は、学力観の変化に伴って、創作過程そのものが学習成果と認識されるスキームが支配的になっているためである。

また、作曲家へのインタビューを通じて、音楽創作学習における評価の多様性について明らか

にした。作曲家が音楽作品を評価する際の視点やプロセスを分析することで、創作意図や過程のみならず、作品も評価の対象として重視されるものであることが示された。インタビューでは、評価の対象がそうした「書かれたもの」に限られず、即興演奏のような「記録として残らない」創作行為においても、その価値自体は認められるべきであるという視点を得た。

さらに、富山大学人間発達科学部附属小学校での授業実践を通じて、パイロットケースとなる授業実践の試行とパフォーマンス課題の実践に基づくルーブリックの作成、学習成果としての創作作品の収集を試みた。これにより、プロセスと成果とをあわせた具体的なルーブリックの案を提出することができ、学習者の音楽的思考を学習成果としての作品から捉えることの可能性が拓かれた。

以上、大きく3点の成果を得た。本研究が中心的な課題としていた学習プロセスと作品を統合する音楽創作授業の開発については、パイロットケースではあるものの、試案の形としてのルーブリックと合わせて提出できたことから、一定程度達成できたと判断している。

その一方で、課題も残された。このことについて、今後への展望に含める形で以下に整理する。

まず、先述のルーブリックについては、妥当性や信頼性の検討に十分踏み込めていない。また、開発した授業についてはモデル化した上で、中学校も含めた応用可能性を探る必要がある。特に後者については、音楽創作学習をデザインする立場が実情に合わせて自ら授業を創造できることが本来的な在り方である。すなわち、本研究によって提出された授業プランやルーブリックがそのまま用いられるより、むしろ新しいプランとして生まれ変わることが期待される。そのため、開発した授業のモデル化と並行して、学習プロセスと学習成果とを統合するための評価理論の構築が必要である。

また、作曲家のインタビューによって得られた結果は、授業プランやルーブリックに十分反映させることが出来ていない。これは、2名のインタビュー結果について質的に分析しているため、現時点では「仮説」を提出した段階であることによる。音楽作品の評価においては、評価者自身の個人的な経験やバックグラウンドにある音楽的な背景が大きく関わっている可能性が明らかになった。そのため、単純にインタビューを増やしてその共通点を探るような方法が適切なのかどうか、今一度検討し直す必要があると考えている。こうした理由から、作曲家による音楽作品の評価プロセスを授業プランやルーブリックに反映させるためには、継続した研究が必要である。

そして、本研究が中心的課題の一つとしていたルーブリックと授業モデルの学校教育現場への提供については、現時点でパイロットケースにとどまっている。今後、解決すべき課題の一部を、新規に採択された科研費基盤研究(課題番号:24K05965)に引き継ぎ、より精緻化したルーブリックと授業モデルの学校教育現場への提供を含め、研究を継続していくことしたい。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 多賀秀紀	4. 巻 16
2. 論文標題 歌唱共通教材は授業でどのように教えられているのか	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 わらべ館 童謡・唱歌研究情報誌『音夢』	6. 最初と最後の頁 14-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 多賀秀紀・大坪史尚・千田恭子	4. 巻 16
2. 論文標題 音楽創作学習におけるルーブリックの開発 - 小学校音楽科におけるパフォーマンス評価および課題の実践をもとに -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 音楽学習研究	6. 最初と最後の頁 91-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 多賀秀紀	4. 巻 15
2. 論文標題 音楽創作学習における評価の変遷 小学校音楽科に焦点を当てて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 音楽学習研究	6. 最初と最後の頁 9-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 多賀秀紀
2. 発表標題 授業実践における「型」と「生成の原理」(共同企画 「音楽科教育の実践研究を問い直す(2)」)
3. 学会等名 日本音楽教育学会 第53回全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 多賀秀紀
2. 発表標題 音楽作品を評価するプロセスに関する研究 - 作曲家へのインタビュー調査と質的分析をもとに -
3. 学会等名 日本音楽教育学会 第53回全国大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 多賀秀紀
2. 発表標題 創作学習におけるパフォーマンス評価の実践とルーブリックの開発 - 小学5年生を対象とした授業実践をもとに -
3. 学会等名 音楽学習学会 第16回研究発表大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 多賀秀紀
2. 発表標題 創作学習における評価の変遷 義務教育段階に焦点を当てて
3. 学会等名 音楽学習学会 第15回研究発表大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 多賀秀紀
2. 発表標題 作曲家による音楽作品の評価プロセス - インタビュー - 調査とその分析をもとに -
3. 学会等名 2023年度 日本音楽教育学会北陸地区例会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 田中耕治【編集代表】 盛永俊弘・田中容子【編著】	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ぎょうせい	5. 総ページ数 161
3. 書名 シリーズ学びを変える新しい学習評価 文例編 新しい学びに向けた新指導要録・通知表(中学校) 2019年改訂指導要録対応	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------